



TITLE:

山本美越乃先生を憶ふ

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

CITATION:

谷口, 吉彦. 山本美越乃先生を憶ふ. 經濟論叢 1941, 52(6): 744-747

ISSUE DATE:

1941-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/131550>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十二卷 第六號

昭和十六年六月

哀辭 故山本博士遺影及署名

論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者勞働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

時論

重慶政府の戰時物價政策……………十龜盛次

記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟠川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

山本美越乃先生を憶ふ

谷 口 吉 彦

山本先生と言へば植民政策を想ひ、植民政策といへば山本先生を想ふほどに、先生と植民政策とは結びついて離れないものとなつてゐる。むろん先生はその他にも工業經濟を講ぜられ、勞働問題を論ぜられ、また水産經濟を主張されはしたけれども、併し矢張り先生は何時までも植民政策の専門家として記憶されねばな

らず、また先生もそれを以つて満足されるであらう。私共は大正八年九月に經濟學部獨立後の第一回生として入學したのであるが、その當時すでに先生は堂々たる植民學者として一家を成してゐられる様に、われ／＼學生には思はれた。併し今から憶へば當時はまだ先生が教授になられて間もない頃であつたし、また先生の主要著作である『植民政策研究』の第一版が初めて世に出た時であつた。これを教科書に使つて講義をせられたのは、恐らく私共の一回生から始まつたのではないかと思ふ。

先生の講義よりは、生涯を通じて、熱心と眞面目と懇切といふ三點で特徴づけられると思ふが、この特徴はすでにその當時から十分に發揮されてゐた。熱心といふ點では、二時間の長い講義がもう時間の鐘が鳴つてゐても、なほ諄々と講義をつゞけられる程で、之に對して不眞面目な學生などが少しでも倦怠の態度を示さうものなら、頭から叱りつけられるといふ眞面目さであつた。また極めて懇切な講義ぶりで、重要な諸點

は必ず二回づゝ繰りかへし講述される風があつたから、何かの都合で一寸聞き洩らした點があつても、暫らく拜聴してゐれば、また必ず繰りかへして、も一と言つて下さるといふので、學生も大に助かることが多かつた。私共は二回生の時にも、ミルの原論を先生から教はつたが、これまた是に懇切なものであつた。

二

私は三回生の最後の夏休みを利用して、田島錦治先生の推薦によつて、満・鮮・支の見學旅行を單身で試みたのであつたが、この旅行について山本先生から一方ならぬ御世話になつたことを忘れてゐない。この旅行に先だつて、私は初めて先生の研究室を訪ねたのであるが、先生は實に至れり盡せりの御親切をもつて、いろ／＼と注意をいたゞき、また自ら筆をとつて長い巻紙に紹介の手紙まで書いて下さつた。先生は教室その他の公的の席上においては、どこまでも謹嚴な一寸近づき難い感じのする方であつたが、個人的に私的に接して見ると、まことに人間味のあるやさしい親切な先生である。ことをこの時に始めて知つたのである。

私はその當時喧しい問題となつてゐた植民地通貨の問題すなはち金建か銀建かの問題を研究題目として旅行したのであるが、この研究についても山本先生から非常な御世話になつた。私は旅行中に蒐集した資料を基礎として、金建論を主張する論文を書きあげ、一部を山本先生へ報告し、一部を朝鮮銀行へ報告したのであつたが、先生もまた金建論者であつたから、大に御満悅の様子であつた。この問題はその後屢々わが論壇の問題となり、數年後の植民政策の試験にも、突如として『銀建問題を論ぜよ』といふ問題を出されて、時事問題にうとい學生を面喰はせたことがあつたと聞いてゐる。

三

私は卒業後の一年近くを大學院に籍を置いて、専ら經濟學史の研究を進めることゝなつたから、自然と山本先生の植民政策から遠ざかることゝなつたが、間もなく和歌山高商に轉出することゝなり、恐らくその最

初の夏休みであつたと思ふが、山本先生が御令息二人を連れられて、和歌浦に海水浴に來られたことがあつた。私は山本勝市君などゝ一所に、あの古びた不老館に先生を訪問したことを覚えてゐる。

和歌山に二年近くもゐた或日のこと、その當時山本先生は經濟學部長に在職せられてゐたが、先生から一通の葉書をいたゞいた。それには來る何月何日、和歌山へ行くから面會したいといふ意味のことが書いてあつた。私は何のことか判らなかつた。當日になつて山本先生は來られた様であつたが、たゞ岡本校長に面談されたきりで、すぐに京都へ歸つて行かれた。後になつてわかつたことであるが、こんな経緯で私も和歌山から京都へ歸つて來たのであるが、當時の學部長としての先生には、こんなわけで少なからぬ御世話になつたわけである。

私は京都へ歸つてから、専ら商業經濟を専攻することゝなつたため、直接に學問上の指導をうけることは少なかつたが、併し私が教授になつた時の學部長もま

た山本先生で、何くれとなく一方ならぬ御世話になつたことは言ふまでもない。先生はその後も引續いて定年まで學部長に重任せられ、たま／＼京大事件の後をうけて、一時は京大總長の事務取扱としてあの困難な當時の大學經營に執掌せられたが、還暦と共に功成名遂けて御退任になつたわけである。

昨年の夏頃のことであるが、私は一寸先生を御訪ねしたい用件があつて、御都合を伺つたところ、生憎そのころ先生は何處かに轉地せられてゐて、どうしても御目にかゝれず、そのまゝになつてゐた。ところが初冬の頃であつたか、先生から御電話があつて、今かへつて來たから會ひたいとのことであつた。私は實に久しぶりに御目にかゝつたのであるが、豫想したよりも遙かに御元氣で、つい二時間近くも四方山の話に時を過したのであつたが、それが實に先生との最後にならうとは、どうしても思はれなかつた。その時も私の深く感じたことであるが、先生は最後まで學問のことを考へ學部のことを思はれてゐた。われ／＼は先生の

遺志を承けついで、學問のため學部のために、微力の
限りを盡さねばならぬ。これが先生の遺靈を慰むる最
善の途であると思つてゐる。